藤井達吉と傘松供養

石川　博章
愛知学泉短期大学

Fujii Tatsukichi and Religious Service in Honour of the *Gongenzaki Kasamatsu*

Hiroaki Ishikawa

キーワード：藤井達吉 Fujii Tatsukichi、傘松 *Kasamatsu*、傘松茶盌 *Kasamatsu Chawan*

1. はじめに

藤井達吉（1881～1964）が西加茂郡小原村北大野鳥屋平（現在の愛知県豊田市北大野町）から、碧南市道場山川尻（現在の愛知県碧南市道場山町）に転居したのは、1950 年（昭和 25）12 月である。そして、1956 年（昭和 31）1 月には、再び静岡県沼津市に転じていく。少年時代に故郷を離れてから 83 歳で亡くなるまで、生地碧南に住んだのはそのわずか 5 年と 1 カ月だけであった。

疎開として移り住んだ小原であったが、60 歳半ばの達吉にとって、慣れない山間の、特に冬の生活は困難だったらしく、それに加え制作面にも行き詰まりを感じていたとのことで、自殺を図るということもあった[註1)]。碧南には、二度と足を踏み入れないと宣言していた[註2)] 達吉であったが、上のような理由からと、旧友の強い勧め[註3)] もあり、故郷に移ったのである。

碧南においては、「食卓は新鮮な海の幸で賑わうようになった。そうした食べ物と暖かい海辺の空気は、栄養失調で、ようやくそこまで辿りついたほどだったという達吉の身体を急速に回復させ、」[1)] と山田が著作で述べている。

達吉の人生を通覧した場合、美術史の中で達吉が評価されているのは、前半生における工芸近代化活動や作品である。一方、碧南に移り住んだのは 69 歳の時で、晩年期にあたる。しかし、決して制作活動は衰えず、水墨画や陶磁器とともに、小原時代に萌芽がある継色紙の制作を、盛んに行った。現在、継色紙の美術界での評価は、あまり芳しくないが、当時、本人自身は制作活動の集大成と位置づけていた[註4)]。また、発表活動も、1952 年（昭和 27）に白木屋で個展を行った後、1955 年（昭和 30）には芝白金迎賓館で継色紙の初披露展覧会を行っている。

しかし、身辺には悲しい出来事が起こっていた。1953 年（昭和 28）に、後継者と考えていた姪が死去している。その影響もあったのであろうか、半年後から自作等を愛知県に寄贈している。

本稿では、碧南時代のそうした中にあって、1952 年（昭和 27）に、行われた傘松[註5)] 供養（の会）について、記録や資料、写真図版をもとにまとめてみたい（当時の資料では「傘松思慕の茶会」（『碧南文化』）、「傘松を惜〈し〉む茶会」（後出資料）、「傘松を惜しむ会」（『藤井達吉の生涯』）と、呼称が定っていないので、本稿では藤井達吉が自歌で読んだ「傘松供養（の会）」に統一する）。会の内容は、かつて名勝として名を馳せた碧南の権現崎の傘松が、枯れ果て消滅する寸前であったことに対し、達吉が碧南在住の人たちを慫慂して、供養の会を実行したのである。この活動から「傘松茶杓」「傘松茶盌」などの達吉作品も生まれており、彼が詠んだ歌などとともに論及し、供養の会の全体像を浮かび上がらせるとともに、藤井達吉の果たした役儀について再確認してみたい。

2. 傘松について

傘松とは、碧南市の権現崎(現在の碧南市権現町)[註6)]にあった大きい松のことである（図２、３）。平成の今日では、港湾整備によって周辺海岸部の埋立てが進み、権現崎は、内陸部に押しやられる形となって、当時の面影を残していない。しかし、かつては碧南の最南端にあたる所であったので、傘松は海上交通の目印になっていた[註7)]。また、明治・大正生まれの人たちは、小学校の遠足で必ず訪れたということだから、当時の人達にとっては馴染みの深い松だったようである。

図版からも想像ができるように、かなり大きな松で、しかもそれが岬の先端にあったわけだから、かなりの存在感を持って、人々に親しまれたことも頷ける。

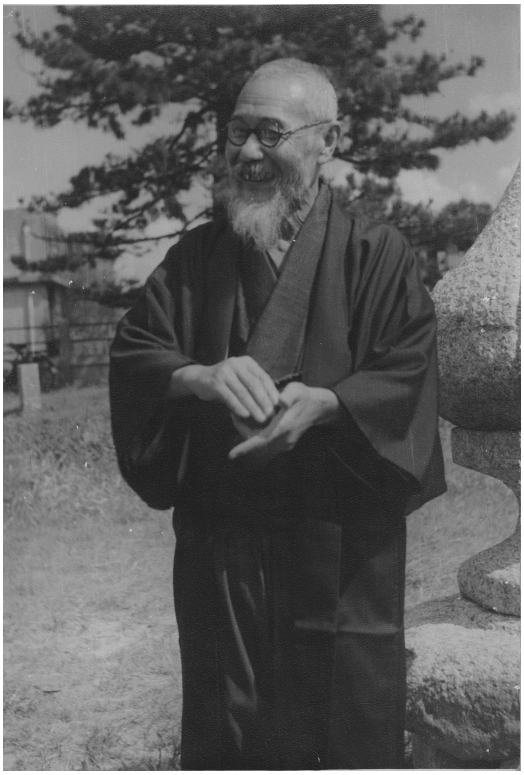

図1　権現崎での藤井達吉(71 歳 1952 年(昭和 27)10 月 12 日撮影)手に持っているのは袱紗と香合か。背後には、左から灯台の管理棟、新たに植えられた傘松の代わりとなる松、常夜灯の頭部(宝珠)が確認できる

では、具体的にどれほどのスケールの松であったかを、『大濱町誌』から引いてみたい。

「人家ヲ離レ田圃ノ間ヲ行クコト約二十町(約 2180 メートル)ニシテ本町西南端ノ一角ニ至ルコレヲ権現崎ト称ス。白砂玉ノ如キ處ニ一株ノ老松アリ傘松ト名ツク枝葉四方ニ垂レテ高サ三丈三尺(約 10.0 メートル)、東西六丈四尺(約 19.4 メートル)、南北六丈七尺(約 20.3 メートル)アリ現今防波堤ヲ沿岸ニ築キテ風浪ニ備ヘ肥料ヲ施テ其繁茂ヲ計リ以テコノ名勝ノ保存ニ努ム」[2)]〔(　)は筆者による注〕。

具体的な数字から、名勝の名に相応しい立派な松であったことがわかる。だから、往時の雄姿を知る人たちが思い入れを持って懐かしむことも理解できる。

図2　権現岬傘松(三河大濱)(「三河大濱名勝繪はがき集」より)。ここでは岬となっている。明治末頃か。

図3 「大濱傘松」(「三河大濱名勝繪はがき集」より)。すでに枯れ始めた枝も確認できる。

では、達吉自身の傘松への思慕心を理解するために、関東大震災の間近に、彼が書いた文章を、すこし長いが、これも引用したい。

「思ひ出るままに傘松を訪ふて見た。十歳位の折に訪づれたのみで久方振なつかしさをおぼへた。青麦原に上げひばりの聲がいとものどかで有た。海は静かに何の音もない。天下泰平の有様で有た。が、日本に三番目とされるこの老松も八百年の老齢に十分の手も盡されないと見えて、西の海よりの枝の全部は枯れて居る。東の一小半のみ常盤の色を見せて居たもふ長いこともあるまい、そのかたみにと思ふて一

枚のスケッチをと思つたが、どふも描けない。見合はせて砂原に寝てひばりの聲とこの老松に思ふままにして居た。再び訪づるまでの健在をいのりつつ帰た。」[3)]

東京住まいの達吉が、故郷を訪れた時に、わざわざ傘松を見に足を延ばしていることからも、彼の思いが伝わってくる。しかし、達吉が訪ねた 1923 年（大正 12）の時点で、すでに「西の海よりの枝の全部は枯れて居る。東の一小半のみ常盤の色を見せて居た」とのことだから、図２，３よりも、かなり悪化して、多くの部分が枯れていたことが分かる。現代ならば、再生のためにいろいろと手の施しようがあるのであろうが、なにしろ昔のことであり、技術的にも、人心的にもそうしたところまで至らなかったということか。その後、1934 年（昭和９）に来襲した室戸台風で、完全に枯れ絶えてしまったとのことだから、残念なことである。図４は、室戸台風後のすでに枯れ果てて、東側の幹を残すのみとなった傘松の姿である。

図4　昭和初期の枯れて幹だけになった傘松。手前のものの詳細不明。

2. 傘松供養の会について

傘松供養は 1952 年（昭和 27）10 月 12 日、午前 10 時から、権現崎の枯れ果てた傘松の株が残る場で行われた。光風会主催となっている。

会の実施については、参会者にあてて前もって案内文が郵送されていた（図５）。背景に往時の傘松が、淡い緑インクで刷られたものである。以下はその全文である。

「一夜権現の傘松は／松ハ枯れても名は残る／昔歌仙甲斐丸がこ能地尓住居／して衣が浦の景勝を賞て／作歌に精進したと言ふ事ハ／人の善く知る處であります／こ能名松も風雪幾百年／樹齢も果てゝ今僅〈か〉に／その根幹を残すのみとなりました／緑ゆた可な頃尓ハ風流人の／来遊も少なくなかったとの事であります／今回傘松を惜〈し〉む茶會を／枯れ果てた松の下で催したいと／思ひますので左記日時尓／御来遊賜ります様御案内申上げます／日時十月十二日（日曜日）午前十時より（雨天順延）／碧南市光風會／○○○○殿」

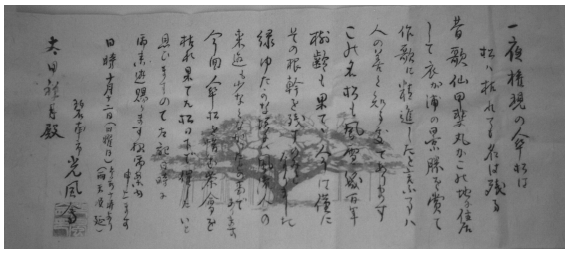

図5　傘松供養の案内文（貞照院蔵）

そして次のような次第（図６）も同封されていた。「供養行事／一．供養始之辞／一．主催者挨拶／一．讀経／一．献茶／一．来賓傘松追憶之辞／一．供養終之辞／野點／傘松の材にて形見の茶杓／傘松の土を交へたる茶盌／追憶歌會／和歌、俳句／御自由に／この天下の名松を惜〈し〉みて／一日の御清遊も無意味でハ／ないと存じますゆつくりと昔／を偲ばうでハありませんか」

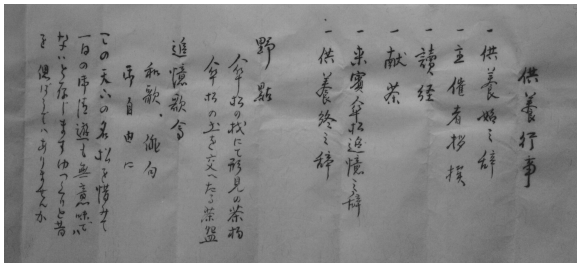

図6　供養行事の案内文（貞照院蔵）

では、この次第に基づいて写真図版[註8)]を見ながら、実際の会の様子を確認していきたい。まず「供養始之辞」に続いて、「主催者挨拶」（図７）があり、その後引き続いて太田戒舟（貞照院住職）による「讀経」があげられた。その後、次第に記載はないが、献歌が披露[註9)]されたようである（図８）。これは、藤井達吉と他二人の歌であった。達吉のものは次の五首[註10)]である。

・「傘松の供養にあふうれしさやさだめといはむこの

秋晴の日に」（図９）

・「傘松よとわにわかれていくとせぞ今日供養にあふわれをひにけり」

図7　主催者挨拶。

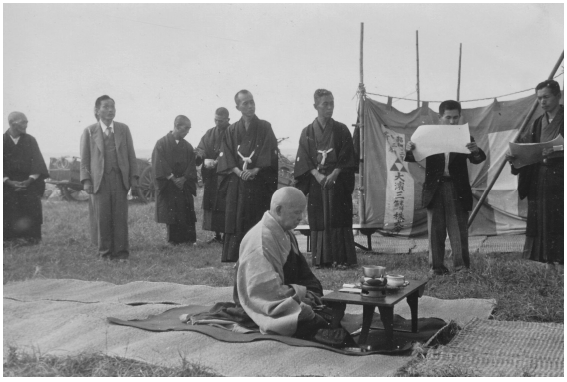

図8　献歌（藤井達吉作の歌を）詠む祢宜田貞一

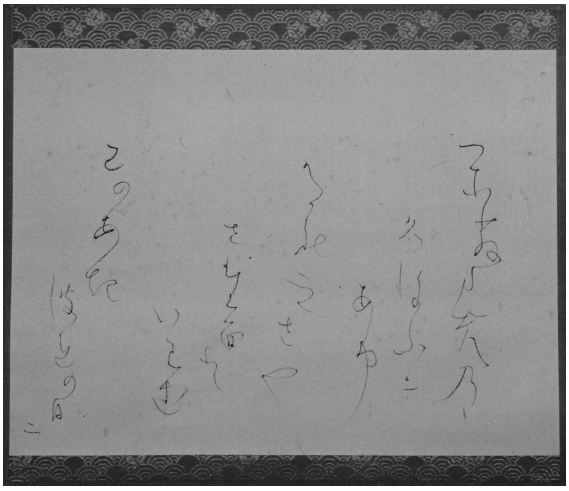

図9　達吉の傘松を詠んだ歌「閑散万都乃／久餘不二／あ布／有礼之さや／さ堂面登／い王む／己のあ起／波連の日二」。短冊ではないので、これは、後に改めて書かれたものかもしれない。（筆者蔵）

・「さだめなりさだめなりけり人の世ぞ我老ひぬれて傘松にあふ」

・「人の世のさだめなるらめ老ひぬれて傘松供養今日詣でつる」

・「年たけて我傘松をとひにけり今日のつどひのうれしきものぞ」。

図 10　中村庄太郎市長の挨拶。左側には枯れた傘松の根元が見える。また、女性の参会者も確認できる。

図７、８の写真からは、会の様子がよく分かる。防砂柵の内側に幔幕を張り巡らし、粗莚、莫蓙を敷きて、その上に必要があれば毛氈を敷き、座を設えている。また、枯れた松の前には祭壇があり、供花と供物を備えている。関係者は正装（紋付き羽織袴）で臨んでいる。そして、準備の運搬に関しても、当時、自動車があるはずもなく、搬入は自転車やリヤカーで行ったことが背後に見えるそれらの存在から分かる。

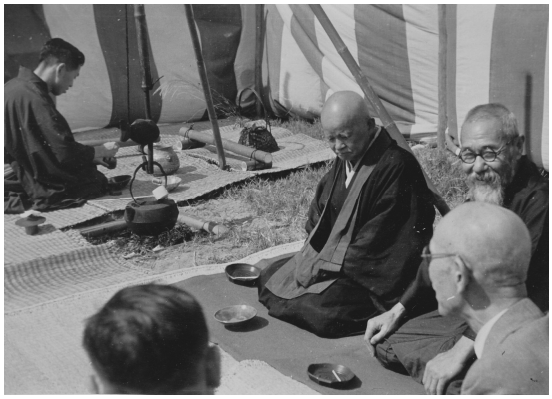

図 11　奥左から茶をたてる骨董商杉浦定彦、貞照院の太田戒舟、藤井達吉。

続いて献茶が行われた後、「来賓傘松追憶之辞」として、中村庄太郎碧南市々長が挨拶をしている（図10）。その後は茶会（図 11、12）、歌・俳句会（図13、14）と続いたようである。

図 12　仮設水屋の様子

図 13　歌・俳句会の様子

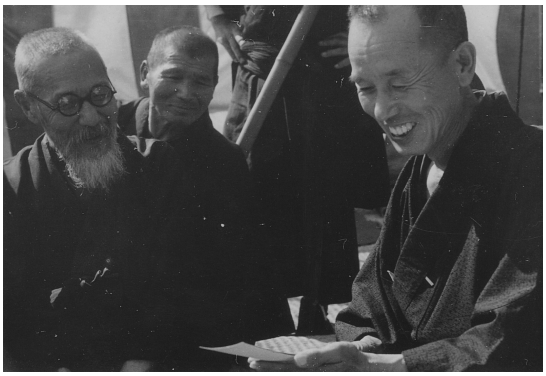

図 14　短冊にしたためた歌を披講する様子（左から藤井達吉、達吉の同級生の黒田由太郎、石川利一）

図 11 からは、茶会の様子がいろいろ分かって興味深い。点前座の奥を、結界で仕切り、花籠に秋草を投げ入れている。炉を切って三又を立てて自在鉤を吊るし釜をかけている。炉縁も含めてすべて青竹である。北野茶会のノ貫の席も、もしやこんな設えであったのであろうかと思わせる簡潔さである。図 12 の水屋からも種々のことが分かる。岬の先端で、給水方法があるわけではないので、当時、みりんなどの輸送に使っていた大きな土瓶に水を入れて運んだことが分かる。湯は大きな釜で薪を使って沸かしている。出された菓子は、どんなものであったか分からないが、箱に書かれた屋号からときわ木製とわかる。煙草盆まで持ち込んでいるが使わなかったのであろう。また、右手前から奥にかけて達吉の絵付けと思われる建水や、のちに触れるが、今回作られた傘松茶盌らしきいくつかが確認でき、なかには三彩風のもの、刷毛目のものがある。

図 15　藤井達吉の返歌（左：表面「さ美しさ東誰駕いふへしや非東の世の起へなむものの許連のさ堂めを」 右：裏面「昭和二十七年十月十二日笠松供養の座尓て」）。ここでは達吉は「笠松」と記している。（筆者蔵）

歌、俳句の会は、「三首又は三句宛短冊に認めそれを披講して」と記録[註 11)]にある。各人が詠んだ歌や作った俳句については、同記録に掲載されているが、ここでは深く立ち入らない。しかし、その中に達吉が返歌を書いたというくだりがあるのでそれについては触れておきたい。達吉は石川利一[註 12)]の歌「な

しみきし衣ヶ浦の舟人にけふわかれゆく松のさひしも」に対して「さびしさと誰かいふべしや人の世のきへなむもののこれのさだめを」という返歌を作ったとある（図 15）。

時間的にはどのくらいの長さの会であったのかは記録がない。また、最後に関係者の記念写真（図 16）があるので、分かる人名を記して掲げておきたい。

図 16　傘松の枯れた根元を背景にした当日の関係者（光風会）の集合写真（最後列の左から四人目より平岩種次郎、藤井達吉、ひとりおいて黒田由太郎、金田晴司。中列左から 5 人目より高松惣一郎、杉浦定彦。前列の左から二人目より石川利一、禰宜田貞一、鈴木吉光、藤岡隆）

3. 傘松茶杓と傘松茶盌について

傘松供養の会においては、藤井達吉の作品が生まれている。一つは、傘松の材を使って作った傘松茶杓（図 17）である。また、もう一つは傘松茶盌（図 18、19）と名づけられた茶盌群が制作され、参会者に記念品として配られた。いかにも達吉らしい趣向である。

茶杓は達吉本人が削ったと思われる。彼の茶杓で知られているものに茶杓「日光」「月光」（豊田市蔵）がある。本題から逸れるが、作風の確認のために見ておきたい。銘は名前のとおり東大寺法華堂（三月堂）の菩薩からの命名である。図録[註 13)]で見ると、「日光」の箱書きには「奈良三月堂の天井板を三十年ほ登前に堂非しものを手箱をつく里をあまりにて作礼留もの」と制作の経緯が記されている。それらは、天井の羽目板なので材は杉と思われる。杉板なので曲げるわけにも行かず、削り出した撓めが浅く、また木目が斜めに入っている関係から、割れを避けるために幅広となり、無骨な茶杓である。

一方、肝心の傘松茶杓についてみて見たい。図 17 は『藤井達吉の生涯』（ｐ306）から転載したものである。『碧南市藤井達吉現代美術館所蔵品目録』にも、他の傘松茶杓が 1 つ掲載されている。それらは姿が違うので、数はさほど作らなかったであろうが少なくとも二本あったことが分かる。図 17 のものは、もちろん材が松なのだから、削り出せば別だが、通常の竹の茶杓とは違いデザインを決める節や撓めがあるわけではない。剣先の櫂をもち、樋を削りだした全体が同じ幅のものである。漆がかけられているわけでもなく白木のままである。少し右に湾曲があって変化はあるが、ぶっきらぼうなデザインである。撓めがなく、右に曲がっているので茶はすくいにくいだろう。しかし、そこがよいのかもしれない。茶杓は、茶人の魂とされ、茶会における取り合わせの要であることを考えると、凡庸ではないこの茶杓、なかなか興味の湧く茶杓である。箱はあるが、筒はないようである。これの所蔵先は不明である。

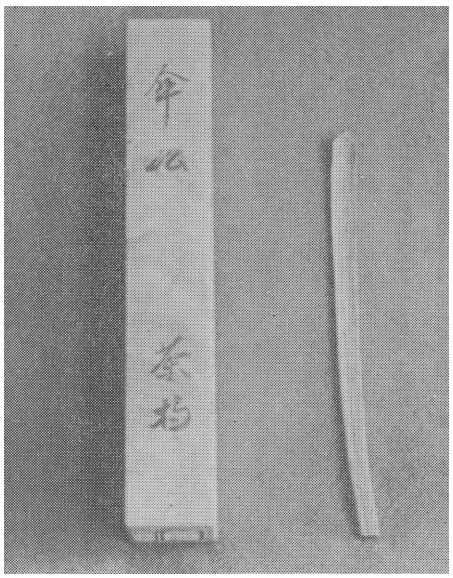

図 17　傘松茶杓（『藤井達吉の生涯』p306 より、所蔵先不明）

次に、傘松茶盌についてである。当日、この茶盌は参会者に配られた。事情を知る人の証言[註 14)]によると、紙箱に説明文（図 20）と本物の松葉、そして茶盌が入れられていたそうである。その様子が図 21 の写真を見れば確認できる。説明文は、以下のとおりである。

「傘松茶盌／千年能緑を誇りし名松／傘松も樹齢果てゝ颯々／の松声聞くを得ず／限りなき寂しさと思慕／能情ひたすらなるも能が／あります　ここに権

現岬の／白砂を交へ傘松思〈い〉出の／茶盌を陶人加藤甲／山本實両氏蘊蓄を傾／け制作寄贈せられしもの／にして郷土能土にてこの作品／を見たるハ無上の喜ひであります／昭和二十七年十月十二日／光風会

図 18　傘松茶盌（藤井達吉による箱書「傘松茶盌　実窯　印」）。この印は、『路傍』に使われた印と同じである。（筆者蔵）

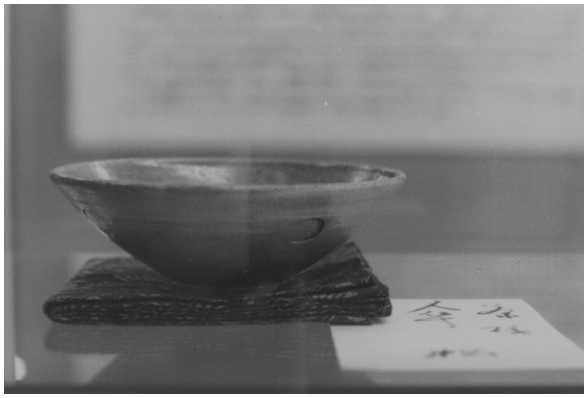

図 19　傘松茶盌（灰釉、所蔵先不明）

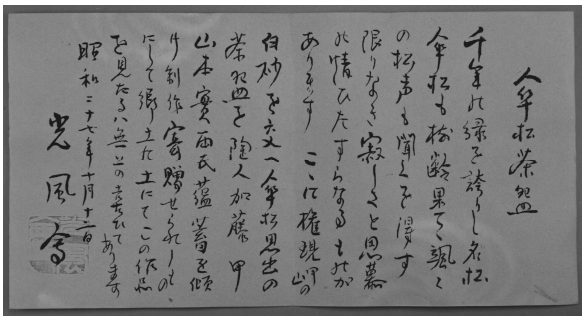

図 20　傘松茶盌の付属した説明文（筆者蔵）

茶盌の制作については、達吉自身が、直接轆轤を引き、焼成したわけではなく、他者が制作したが、後年、箱書（図 18）を自らしていることから、制作段階において彼が少なからずの関与をし、彼の意匠が及んでいると思われ、彼の作品と見做せる。

説明文にあるように実作者は加藤甲[註15]と山本實[註16]である。二人によるものなのでそれぞれ作風がちがっていたと思われるが、管見の限りではいずれも平茶盌である。釉薬の種類は、アメ釉のもの（図 18）、灰釉のもの（図 19）がある。先に触れた図 12 の水屋を見ると、刷毛目や三彩の平茶盌も確認できる。図 18，19 に姿が似ているので傘松茶盌かもしれないが、はっきりしたことは分からない。

図 18 の山本實窯の茶盌は、後に桐箱を作り、達吉によって箱書されたものである。この茶盌の手取りはすこぶる軽い。土に権現崎の砂を少量混ぜているとのことであり、総釉がけで土が直に確認できるわけではないが、教示[註17]によると土は三河土で、アメ釉はフリット釉[註18]とのことである。先の説明文にも「郷土能土」とあるので間違いないであろう。三河土は、耐火度が低く、焼締められず、漏れが生じやすいそうだが、そのために単味の土ではなく混ぜ土等の工夫もされていることと思われる。その他の特徴として、広がりを持つ腰のあたりに「傘」「松」「思」「慕」の四文字が印で、90 度間隔で押されている（図 19 の茶盌で確認できる）。この会のためにだけに、茶盌を作るということは風韻に富んだことである一方、時間や労力が要ったことと思われるが、しっかりとやり遂げられている。

図 21　もらった茶盌を見入る人たち。また、多くの参会者があったことが分かる。

4．おわりに

「もはや戦後ではない」と政府が経済白書に書いたのは 1956 年（昭和 31）だから、1952 年（昭和

27）といえば、まだまだ、復興が遂げられず、生活に追われる毎日だったと思う。しかし半面、だからこそ文化的な活動に焦がれるという一面もあったのであろう。

この傘松供養の会は、光風会主催となっているが、筆者は、達吉が慫慂したとして書き進めてきた。けれども、実は主導者として達吉の名前はどこにも記されていない。しかし、関係者が多く生きている時に取材して著された山田光春の『藤井達吉の生涯』に、達吉が「指導し」「催し」たとあるので疑いのないことである[註19)]。いやむしろ、達吉の名前が表に現れてこないことは、いかにも彼らしく、それが達吉が主導していたという何よりの証左とも思える。

写真図版で分かったように準備活動は大変な量で、かつ全て人海戦術で行われたことが分かる。また、多くの茶盌制作も大変であったことと思う。そうした会が行われ、完遂されるには、それを求める機運や組織の存在だけでは十分ではない。やはり一人の秀でた主導者、あるいは強い思いを持った中心人物の存在が不可欠であると思う。その意味では、達吉がいなければ、傘松供養の会は行われることはなかったであろう。また、故郷を長く離れ、傘松をはじめ故郷への思慕の念が大きかった達吉だからこそ、強いリーダーシップで推進できたのだと、改めて感じている。

傘松茶杓と同茶盌については、まだ分からないこともあるが、傘松供養については体系的に一通り、記すことができたと感じている。間違いがあれば、指摘していただきたい。

引用文献

1）山田光春『藤井達吉の生涯』　風媒社　P299（1974）
2）石川松衛編『大濱町誌』碧海郡大濱町役場　P145（1929）
3）藤井達吉「ひとりごと」『アヲミ』20号　P10（1923）

参考文献

石川利一「傘松思慕之茶会記」『碧南文化』7号（1952）
山田光春『藤井達吉の生涯』風媒社（1974）
展覧会図録『豊田市郷土資料館館蔵品展』豊田市教育委員会（1989）
『碧南事典』碧南市（1993）
池田巌『茶道具の世界7茶杓』淡交社（2000）
石川博章「藤井達吉作品紹介③」『碧南藤井達吉芸術文化現代』第4号　碧南市芸術文化振興会　（2003）
『碧南市藤井達吉現代美術館所蔵品目録2010』碧南市藤井達吉現代美術館（2011）

註

1）山田光春　『藤井達吉の生涯』　風媒社　P290－296（1974）
2）同書　P299
3）同書　P300
4）栗木伎茶夫氏は達吉本人から、晩年は継色紙に一番力を入れて制作していると聞いたとのこと。2000年(平成12)10月25日（水）の筆者の栗木伎茶夫氏へのインタビューより。
5）大きな傘を広げたような容姿だったので、古来より傘松と呼びならわしていたようである。また、呼称も「かさまつ」だけでなく「からかさまつ」とも呼んだようである。
6）「ごんげんざき」。権現岬（ごんげんみさき）と記すものもある。
7）夜間用としては1822年(文政5)に、漁民たちが船の夜間航行の便に供するために、大きな常夜灯（石製、高さ14.7m、火袋1.2m）を建立したようであるが、1854年(安政元)の三河地震により倒壊してしまったとのことである（その破損した常夜灯の頭部が図1の背景と、図3の傘松の根元に確認できる）。その後、1933年(昭和8)に灯台が建設されるまでは、夜間、カンテラ（ランプのことで海運の世界ではこう呼ぶ）を吊り下げて用に供したらしい（図2には、傘松の左隣に灯柱があり、吊り下げられたそのカンテラが確認できる）。
8）本稿に挿入している図版のスナップ写真は、すべて筆者の祖父（註12参照）が、所蔵していたもので、現在は筆者の手元にある。
9）献歌の披露が行われたことは、「供養行事」にはなかったが、会の様子を後になって記した記録（石川利一「傘松思慕之茶会記」『碧南文化』7号（1952））に記載がある。
10）石川利一「傘松思慕之茶会記」（『碧南文化』7号　P3（1952））に、これに関する記述がある。
11）同文章　P3
12）石川利一（いしかわとしいち　1900～1979）藤井達吉の歌集『くさまくら』の編者を務める。筆者の祖父。このとき光風会のメンバーであった。
13）展覧会図録『豊田市郷土資料館館蔵品展』豊田市教育

委員会　P41（1989）

14)藤井達吉の会の例会(2001 年(平成 13) 2 月 14 日(水)碧南市図書館ボランティア室）における牧野禅光氏（貞照院住職）の証言による。

15）加藤甲（かとうこう　1914～1997）瀬戸生れ。瀬戸窯業高校卒。1941 年(昭和 16)より大浜三鱗窯業に勤務する。藤井達吉とは旧知の仲。趣味として三河土を使って茶盌等を焼く。

16）山本實（やまもとみのる　1919～1997）高浜市の山勘製陶所の主人。常滑窯業高校卒。藤井達吉とは旧知の仲。

17）2002 年(平成１４)４月３日（水）の山本祝（やまもといわえ 山本實の妻）さんへの、筆者のインタビューによる。

18）フリット釉とは、ガラス釉薬のこと。釉薬の持ついろいろな欠点を前もって除くために、あらかじめガラス粉として生成したものをいう。低温で解けることやガラス質の透明感がでるなどの利点がある。

19）山田光春　『藤井達吉の生涯』　風媒社　P 305（1974）